九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

コロナ禍における「特別活動」での「主体的・対話的で深い学び」の可能性

坂巻, 文彩
九州大学大学院人間環境学府 : 学術協力研究院

https://doi.org/10.15017/5068319

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 24, pp.39-45, 2022-09-30. Seminar of Educational Sociology, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

コロナ禍における「特別活動」での「主体的・対話的で深い学び」の可能性

The Possibility of "Proactive, Interactive, and Deep Learning"
-Focused on Tokkatsu (Student-led Activities) with COVID-19-

坂巻　文彩

1. 新型コロナウイルスによる「特別活動」への影響と制約のある条件下での創意工夫の必要性

2020 年、新型コロナウイルスの影響で、学校が、一斉に、臨時休校となり（文部科学省，2020a，p.2）、従来の教育活動が行うことができない状況に追い込まれた。現在（2022 年 8 月時点）も、新型コロナウイルス感染者数は増加し（厚生労働省，2022）、収束の見通しが立たない状況にある。今後も、新型コロナウイルスの影響で、長きにわたり、教育活動が制約を受ける可能性は否定できない。

学校では、多様な教育活動が行われているが、中でも、新型コロナウイルスの影響を受ける主要例に、「特別活動」が挙げられる。

「特別活動」とは、「学校における様々な集団での活動を通して、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動の総体（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会，2017，p.21）」であり、ホームルーム活動（または学級活動）、生徒会活動、学校行事が含まれる（文部科学省，2018a，pp.478-480；文部科学省，2017a，pp.162-165）。

学校行事には、儀式的行事、文化的行事、健康安全・体育的行事、旅行・集団宿泊的行事、勤労生産・奉仕的行事が含まれる（文部科学省，2018a，p.480；文部科学省，2017a，p.165）。

文部科学省が、2020 年 6 月に、公立学校を対象に実施した調査（2020b，p.5）では、95%の中学校、高校が、「学校行事の見直し」を行う、または行う予定であると回答した。日本特別活動学会研究推進委員会が、2020 年 6 月に実施した学会員を対象にした調査でも、「特別活動」の実施に制約があるという回答が、80%を超えている（日本特別活動学会研究推進委員会，2020，p.2）。

「特別活動」の中でも、学校行事は、生徒の期待値の高い教育活動である。東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所が中学生、高校生を対象に調査を行い、大﨑（2022）が、データの分析を行った報告書がある。この調査では、学校が再校したとき、中学生、高校生の 70～80%は、「学校行事が減ってしまい残念に思った」と回答し、大﨑は、「学校行事という仲間と共に過ごす貴重な機会が 失われたことへの失望がうかがえる」と報告している（大﨑，2022，p.72）。

「特別活動」は、生徒、教員だけでなく、保護者、地域住民等、多くの人と連携しながら、協働的に学びを行うものであるため、対人接触に制約が生じるコロナ禍では、実施することが難しい状況になるのは、やむを得ない。「特別活動」の中でも、生徒が長時間、密集して準備活動を行い、外部との接触機会が多い文化祭は、新型コロナウイルス感染の可能性が高く、特に、実施が容易ではない行事の典型である。

もっとも、文化祭は、日頃の学習活動の成果を発表する場で、教育課程上、重要な位置づけにあり、生徒の期待値も高い活動の一つであることが想定される。コロナ禍で活動制限の危機にある中では、活動維持の可能性を探求する動きは必然的に生じてくる。つまり、文化祭を含む「特別活動」の実施方法は、各学校の裁量に任されているが、学校が、いかなる創意工夫を凝らすのかは、特色ある学校づくりを行う上で、重要な課題になっているからである。

2. 政策上の中等教育及び「特別活動」での「学び」

2.1. 中等教育での「学び」

「特別活動」での「学び」について検討する前提として、まずは、中等教育課程では、どのような授業づくりを目指すべきであると考えられているのかを、整理する。

中等教育の教育課程の基準は、学習指導要領に記載がある。教育課程では、「生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと」を求め、「生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」を要請している（文部科学省，2018a，p.28；文部科学省，2017a，p.23）。

「主体的・対話的で深い学び」の定義については、中央教育審議会（2016）の答申に下記のような記載がある。

主体的な学び
学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる。

対話的な学び
子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める。

深い学び
習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して 考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう。

（中央教育審議会，2016，pp.49-50）

学習指導要領では、各学校が、学びの質の向上に向けた取り組みを行うことを重要視していることが読み取れる。

2.2.「特別活動」での「学び」

「特別活動」の指導方法については、教職課程コアカリキュラムに記載がある。

教職課程コアカリキュラム（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会，2017）には、「特別活動」の全体目標について、下記のように示している。

学校教育全体における「特別活動」の意義を理解し、「人間関係形成」・「社会参画」・「自己実現」の3つの視点や「チームとしての学校」の視点を持つとともに、学年の違いによる活動の変化、各教科との往還的な関連、地域住民や他校の教職員と連携した組織的な対応等の「特別活動」の特質を踏まえた指導に必要な知識や素養を身に付ける

（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会，2017，p.21）

「人間関係形成」・「社会参画」・「自己実現」については、中学校（文部科学省，2017b）または高校（文部科学省，2018b）の学習指導要領の解説で、下記のように記載されている。

人間関係形成
集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点

社会参画
よりよいホームルームや学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとするという視点

自己実現
集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点

（文部科学省，2018b，pp.11-13；文部科学省，2017b，pp.12-13）

「特別活動」は、「人間関係形成」・「社会参画」・「自己実現」の3つの視点や「チームとしての学校」の視点を持つという点に特徴があり、学校が社会の縮図であるということを理解しながら、社会生活を送る上で重要な資質・能力を身につけることが期待されているものと思われる。

「特別活動」の一つである学校行事の目標として、学習指導要領に、「全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための 体験的

な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。」との記載がある（文部科学省，2018a，p.480；文部科学省，2017a，p.164）。さらに、学校行事の一つである文化的行事は、「平素の学習活動の成果を発表し、自己の向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しんだりするようにすること」を目指すという[(1)]（文部科学省，2018a，p.480；文部科学省，2017a，p.165）。

学校行事の一つである文化的行事は、教職課程のコアカリキュラム、学習指導要領からも分かるように、教科横断的な学修の役割を果たすことも求められている。

以上のことから、「特別活動」、特に、学校行事の一つの文化的行事では、他の教科以上に、教科横断的で、「主体的・対話的で深い学び」により、（汎用的）能力を育成することが期待されているものと思われる。

3. コロナ禍の「特別活動」に関する研究

新型コロナウイルスの「特別活動」への影響に関する検討、特に、本研究で取り扱う中等教育で実施する文化祭については、検討が積み重ねられつつある。

例えば、田中・佐久間・山中（2021）や登坂（2021）がある[(2)]。

田中・佐久間・山中（2021）は、「特別活動」の中で、可能または不可能な活動は何か、について、インターネット、新聞等の公開資料をもとに検討した。この検討の中で、文化祭を中止し、作品展示に代替するよう行政指導があった事例を紹介し、突発的なことが生じた際に、いかにして、学校教育の質を担保するのかが、課題であると示している（田中・佐久間・山中，2021，p.31，p.33）。

登坂（2021）は、「特別活動」はコロナ禍で「生きる力」をどのように育むかについて検討した。この検討の中で、コロナ禍における「特別活動」の諸相を分析し、文化祭について、1事例を示した。この検討を通じて、厳しい環境下にあって教師、PTA、地域社会の人々が「子どもの最善の利益」を考え努力を重ねていることを明らかにしたが、子どもたちが自覚的・主体的に参画したかどうかは、不明瞭であるとした（登坂，2021，pp.44-45）。

他にも、先述した日本特別活動学会研究推進委員会（2020）の調査があり、文化祭では、規模の縮小、ICTの活用等での工夫の必要性を挙げている（日本特別活動学会研究推進委員会，2020，p.7）。

これらの研究からは、文化祭を代替的措置により行うことが可能であることは理解できる。しかし、上記の研究で取り上げられた事例は数例にすぎず、他の方法による代替措置の可能性もある。また、両研究とも、コロナ禍で文化祭を実施するに当たって、学校側、地域社会の取り組みの状況は把握できている。しかし、生徒が、実際に、どのような取り組みを行っているのか、その取り組みについて、どのように感じているのかが明確ではない。すなわち、教育課程上の「特別活動」としての「学び」ができているのかどうかについて、生徒側の観点での状況把握が曖昧な状況にある。

4. 課題設定

そこで、本稿では、実際に、新型コロナウイルスの影響のもと、学校行事を行った場合、どのような形式での実施が試みられたのか、検討する。先述通り、特に、学校行事は、生徒の「主体的・対話的で深い学び」が求められるものと思われるが、実施条件に制約がある場合でも、この「学び」は、可能なのかどうかについても、考察する。

「特別活動」は、生徒の資質・能力を育成する上で、教育課程上、重要な位置づけにある。したがって、学校行事の実施が阻害されれば、多様で汎用的な能力を育成する機会の喪失となり、生徒の学校生活上の楽しみを奪うことにもなる。そこで、その対応対策として千葉県教育委員会（2022）のように、学校行事について、必要な感染症対策の徹底は継続しつつ、段階的に教育活動の制限を緩和するよう指示している場合もある。コロナ禍において、学校行事を行う上で、実際に、どのような工夫をしているのか、いずれの学校も、参考となる情報を把握したいところであろう。一つの策として、先進的な事例が紹介されている新聞記事をもとに、実利情報を検討してみた。

もっとも、学校行事といっても、多様である。そこで、日頃の学習活動の成果を発表し、教科横断型の学習の場であり、生徒の期待値が高いと思われる文化祭に限定して検討を行ってみた。

対象記事は、2022年7月に、「朝日新聞クロスサーチ」で、「特別活動、コロナ」「文化祭、コロナ」というキーワードでヒットした以下の7件の事例とする。

以下、コロナ禍の文化祭の状況を概観する。新聞記事の事例は、生徒の視点を重視して報告されたものであ

り、「主体的な学び」の可能性の観点から検討を行い、「特別活動」の指導において留意すべき点の抽出を試みた。

表 1　分析対象事例

	学校名	方法
1	滋賀県立膳所高校	オンライン/対面併用
2	私立大和青藍高校	対面
3	千葉県立銚子高校	オンライン
4	私立麗澤中学校	オンライン/対面併用
5	私立武蔵高校	オンライン
6	国立筑波大附属高校	オンライン
7	「多摩生徒会協議会」中心	オンライン

5. 事例紹介

以下、事例 1～事例 7 まで、新聞記事に書かれた概要を紹介する。

5.1. 事例 1：滋賀県立膳所高校

滋賀県立膳所高校（朝日新聞，2020a）の文化祭では、クラスごとの出し物のほかに、1 年生から 3 年生までが縦割りグループを作り、劇、ダンス、音楽ライブを実施するのが特徴であるという。新型コロナウイルスの影響のため、当初、文化祭は、中止の予定であったが、生徒会、縦割りグループの代表が相談し、教員を説得し、実施に漕ぎ着けた。生徒会、縦割りグループの代表の相談では、実施規模について、意見対立があったという。また、教員に対しては、感染防止対策を盛り込んだ計画案を提出したという。計画案（全 23 ページ）は、感染の広がり具合によって、規模を変えられるように、「グループ単位」「クラス単位」「屋外でのみ」という 3 種類に分けて作成した。感染防止対策については、国や県の教育委員会の資料を参考にしながら、作成したという。

試行錯誤の結果、プログラムは、密を避けた校庭でのダンスと、映像作品が中心となった。従来の文化祭より、縮小する結果となったが、「『しょぼい』祭りではあるが、『よくここまで』と胸が熱くなる」ような満足感が得られたようである（以上，朝日新聞，2020a）

今後、新型コロナウイルスの感染防止策を講じて、対面方式での文化祭の開催に漕ぎ着けた方法が参考になると思われる。

5.2. 事例 2：私立大和青藍高校（福岡県直方市）

私立大和青藍高校（朝日新聞，2020b）は、プロ野球チーム・ソフトバンクホークスの本拠であるペイペイドームで、縮小・融合した体育祭・文化祭を行った。参加者は、教員、生徒、「1 家族 2 人まで」とされた保護者である。県及び球団側と協議を重ねて開催に至ったという。午前中に体育祭、午後に文化祭を行った。文化祭では、外野の隣接ステージで、歌や合奏、演劇などを披露した。生徒会長は、「一生忘れられない思い出になりました。何か一つでも行事をとの思いが実現し、本当にうれしい。」と述べている。開催経費は、約 500 万円で、学校の会計や PTA、卒業生組織の基金を活用したという（朝日新聞，2020b）。

事例 1 と同様に、コロナ禍で対面方式での体育祭・文化祭の開催が難しい中で、それらの開催方法を見出した点で、示唆する所の多い好事例であると思われる。

5.3. 事例 3：千葉県立銚子高校

千葉県立銚子高校（朝日新聞，2020c）では、2020 年度の文化祭は、オンラインになった。生徒側が提案し、学校側が承諾したという。動画撮影は、どのクラス、部活も、スマートフォンで行った。練習や撮影は、夏休み中に行い、各 10 分以内の動画にまとめた（合計 22 本）。9 月に、スクリーン、パソコン、スピーカーを持ち込み、各教室で上映した。文化祭実行委員長は、「人との触れあいはなかったけれど、『あの時は特別だったな』って思い出せる動画が残った。これはこれで最高です。」と話している（朝日新聞，2020c）。

非対面の文化祭ではあったが、オンライン利用での開催という新たな方途を採用することで、文化祭の意義や効果を問い直しの新たな方法の実験機会になっている点が、興味深い。

5.4. 事例 4：私立麗澤中学校（千葉県柏市）

私立麗澤中学校（朝日新聞，2020c）では、オンライン形式と会場との発表を同時に行う「ハイブリッド型」の文化祭を行った。例年通り、生徒がテーマを決めて、教室で発表する形式のほか、タブレット端末に動画を追加する方式を設けた。教室で発表する際には、3 密（密集、密接、密閉）対策を行ったという。オンラインでは、Web 会議システムの「Zoom」の複数の画面を使用して、別々の楽器演奏を同時に披露したりしたという。

参加者は、教職員と生徒のみであった。学生部長は、「生徒が画面を通して表現し、編集技術も向上してよかった。」と述べている。（朝日新聞，2020c）

実験機会を積極的に活用した点は、事例3と同様である。オンラインと対面方式の両方を採用したハイブリッド型の文化祭開催は、将来にも活きるノウハウ獲得に連なったものと思われる。

5.5. 事例5：私立武蔵高校（東京都練馬区）

私立武蔵高校（朝日新聞，2020d）では、2020年度は、文化祭を中止することになった。ただ、一括発注・集計する会計システムを構築したり、入場門の設計・製作をするなど、準備を進めてきたという。文化祭は、中止になったが、記録に残すべく、参加団体の取り組みや学校紹介ツアーをオンラインで公開したり、パンフレットの制作、グッズの販売を実施することを決定したという（朝日新聞，2020d）。

文化祭の開催が中止になっても、進めてきた準備で得られた成果を積極活用している点は、他校でも参考になると思われる。

5.6. 事例6：国立筑波大附属高校（東京都文京区）

国立筑波大附属高校（朝日新聞，2020d）では、2020年度は、文化祭を1か月延期し、仮想現実（VR）を使ったオンライン形式を軸に開催した（新聞記事は、文化祭実施前の取材による。高校HP（筑波大附属高校（2020）にも、案内がある。）。文化祭実行委員会では、コロナ禍で文化祭を開催する意味を何度も話し合った。バーチャルイベントの開催ツールを用いて、アバターと呼ばれる「分身」が、オンライン上の「ワールド＝学校」を歩き回る仕組みを考えている。各参加団体の「部屋」を訪ねたり、「ライブ会場」では、バンド演奏で盛り上げたり、受験生向けの「学校説明会」向けのコーナーや卒業生が語らう「同窓会室」を設け、外部の人にも楽しんで貰う仕組みであるという（朝日新聞，2020d）。

文化祭の実施が、1か月延期になった結果、開催の意義を、時間をかけて問い直し、オンライン開催の質を上げるための方途の構築に力を注いだ点が、独特である。

5.7. 事例7：「多摩生徒会協議会」中心

学校の垣根を越えた事例として、高校生が企画した「全国オンライン学生祭」を挙げる[(3)]（朝日新聞，2021b。新聞記事は、文化祭開催5日前である。）。この学生祭は、コロナ禍で、文化祭が開催できないので発表の場がなかった全国の生徒のために、東京都多摩地区にある高校の生徒会役員を務める生徒らでつくる「多摩生徒会協議会」を中心に、企画された。生徒らで、スポンサーを探し、2か月間で、約70回のミーティングを重ねて準備がされた。この学生祭では、小説、エッセー、ダンスや音楽など、9つの企画が公募された。特設のポータルサイトには、生徒らが応募した作品を掲示し、受賞結果は、YouTubeでライブ配信された。ウェブサイトの制作費やライブ配信の費用を支援して貰うため、クラウドファンディングも始めたという。「多摩生徒会協議会」の議長は、「コロナが収まったとしても、全国の高校生が集まる機会として、今後も続けていきたい。」と述べている（朝日新聞，2021b）。

オンライン開催の利点を活かすことのできる文化祭の開拓は、コロナ禍が収束した後にも生きる貴重なノウハウになるのではないかと思われる。いわゆる、「災い転じて福となす」ということになる可能性がある。

6. 考察

以上、「朝日新聞クロスサーチ」で検索できた7件の事例を示した。まず、コロナ禍のもと、どのような形式で文化祭が実施されたかである。いずれの学校の場合も、従来とは異なる形式で実施が実現されており、7件中6件（うち2件は、オンライン／対面併用）は、オンラインを駆使し、1件は、学校以外の場で開催された。新聞記事で紹介された時点では、準備段階であった事例もあり、すべての対象事例について教職員または生徒の考えを把握することはできていないが、どの学校の記事からも、「従来と異なる形式で実施すべきではない（または、実施すべきではなかった）。」というような否定的な感想は無かった。特に、オンラインで実施する場合、臨場感は味わえないが、対面ではない場での表現方法を見出すことができ、充実感が得られている点は重要である。また、動画は記録として残すことができるため、後日、振り返り、再検討できるというメリットも得られたようである。

事例7：「多摩生徒会協議会」中心の事例のように、オンラインで文化祭を実施する場合、学校の垣根を越えた活動も可能である点は、特に着目したい。各学校ごとに置かれている状況が異なり、インターネット環境等の整備が難しい場合があるかもしれないが、オンライン開催の利点を活かすことのできる文化祭の開拓は、将来にわたり持続可能なノウハウの獲得となるのではないか。

次に、実施条件に制約がある場合でも、「主体的・対話的で深い学び」は、可能なのかどうかについてである。文化祭の計画の過程は、必ずしも、新聞記事に詳細な記載がなく、3件の事例から推察してみる。

事例1：滋賀県立膳所高校の場合、文化祭は、当初、中止の予定であったが、生徒間で話し合い、教員を説得し、開催に漕ぎつけた。生徒側から、文化祭の開催を希望し、計画案作成を通じて、教員という立場の異なる者を説得するための表現の構築の仕方も学んでいる。新型コロナ感染という危機に対して、教員ではなく、生徒自身が、積極的に対応したという点で、当事者意識も生まれており、「主体的・対話的で深い学び」に繋がっていることが推察できる。

同様に、事例6：国立筑波大附属高校の場合も、生徒間で、コロナ禍で文化祭を開催する意義について検討しており、文化祭のもつ根本的な意味合いについて深く理解する契機になっているものと思われる。

さらに、事例7：「多摩生徒会協議会」中心の場合、多様な学校の生徒が集まり、資金集めを含め、新たな形の文化祭を創出している。各学校が個別に実施した場合に比べると、各学校の生徒が主体的かつ共創的な観点で協議を重ね、実現に漕ぎ着けている過程は、まさに、創造的である。

この3つの事例からも分かるように、従来とは異なる形式で文化祭を行うことは、先例を踏襲することができないため、より多角的な視点をもち、実施に向けて、多くの課題に対応しなければならないという点を、どう解決するかが、キーポイントである。実現に漕ぎ着ける過程の意義に着目したい。これらの事例は、従来のような対面での実施ができない場合であっても、新たな「主体的・対話的で深い学び」の局面を切り開くことが可能であることを窺わせる。

この3つの事例以外の場合は、新聞記事では、文化祭の実施に至るまでの過程が不明瞭ではある。しかし、従来とは異なる形式の文化祭の実施では、多くの想定外の事態に遭遇したであろうことは、想像に難くない。未曾有の事態で実施する文化祭を通じて、教員が、生徒の意見を尊重することで、生徒が、能動的に学修する契機として生かし、教員と生徒による共同の学校づくりに繋げ得ることが分かったのではないか。

コロナ禍という制約のある環境の中で、各学校が、活動可能な方途を模索している。これらの各学校の取り組みは、まさに、実験的、模索の趣きが強く、効果を評価する側面が重視され、文化祭を含む「特別活動」の意義が再定義されることに繋がる可能性は大きい。また、コロナ禍の収束後においても、文化祭を含む「特別活動」は、実施方法のノウハウが蓄積されていることもあり、今まで、前例主義で行ってきた行事の見直しが行われると考えられる。つまり、文化祭を含む「特別活動」は、様変わりすることもあり得る。

本稿で取り上げた事例は、一新聞の記事に掲載されていた事例であり、先駆的な方法で成功した場合だけが紹介されているのかもしれない。日本全体で見た場合、もっと、奇想天外な方法を開拓した学校が多くあることも考えられる。全国レベルでの事例収集を行う必要があると考える。

＜注＞

(1) 文化的行事には、生徒が各教科等における日頃の学習や活動の成果を総合的に発展させ、発表し合い、互いに鑑賞する行事と、外部の文化的な作品や催し物を鑑賞する などの行事がある。前者には、文化祭（学校祭）、音楽会（合唱祭）、弁論大会などがあり、後者には、音楽鑑賞会、映画や演劇の鑑賞会、伝統芸能等の鑑賞会や講演会 などが考えられる（文部科学省，2018b，p.91；文部科学省，2017b，p.98）。

(2) 他にも、 鶴田（2021）がある。 鶴田（2021）は、東京都の小学校教員を対象に、緊急事態宣言による一斉休業後の「特別活動」の状況についてインタビューした。この調査の中で、授業再開直後、「学びの保障」を 求められたことにより教科指導を優先し、「特別活動」は縮小せざるを得えない状況になったこと等を示している（鶴田，2021，p.75）。

(3) 他にも、 全国の高校生が集う総合文化祭として「青二祭」があり、全国から集まった約100組の出演希望者の動画の中から、12組を選考し、オンラインで配信した（朝日新聞，2021a）

＜参考文献＞

朝日新聞，2021a，「高校生の『青二祭』あす配信（2021年3月30日・朝刊）」

朝日新聞，2021b，「オンラインで文化祭　学生集まれ！（2021年3月22日・朝刊）」

朝日新聞，2020a，「『しょぼい』祭り　でも、胸が熱く（2020年11月15日・朝刊）

朝日新聞，2020b，「ドーム駆けた　思い出できた（2020年11月3日・朝刊）」

朝日新聞，2020c,「オンライン文化祭　前向きに挑戦（2020年9月24日・朝刊）」
朝日新聞，2020d,「文化祭や体育祭　新たな形で（2020年6月6日・朝刊）」
大﨑裕子，2022,「長期休校後の中高生の心境ー喪失，困難，不安にみる新型コロナウイルス感染拡大の影響ー」東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所編『コロナ禍における学びの実態ー中学生・高校生の調査にみる休校の影響ー（「子どもの生活と学び」共同研究プロジェクト調査報告書）』，pp.71-81.
https://berd.benesse.jp/up_images/research/manabjitt ai2020_all.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会，2017,「教職課程コアカリキュラム」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/ shingi/ ou shin/__icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_13.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
厚生労働省，2022,「新型コロナウイルス感染症の現在の状況と厚生労働省の対応について」
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_27318.html
（最終検索日：2022年8月20日）
田中真秀，佐久間邦友，山中信幸，2021,「突発的事項時における学校教育の 教育保障に関する一考察ー『新型コロナウイルス』における『特別活動』の実態からー」『川崎医療福祉学会誌』，vol. 31, no.1, pp.17- 34.
千葉県教育委員会，2020,「新型コロナの影響を踏まえた学校教育活動の制限緩和について」
https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/anzen/press/2022/kyouikukatudou-seigenkanwa.html
（最終検索日：2022年8月20日）
中央教育審議会，2016,「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の 学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuk yo0/ tou shin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/ 138092_0.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
筑波大附属高校，2020,「週刊桐陰　ようこそ　桐陰祭ワールドへ」
https://www.high-s.tsukuba.ac.jp/shs/wp/wp- content/uploads/2020/10/%E9%80%B1%E5%88%8A%E6%A1%90% E9%99%B0%E7%AC%AC%EF%BC%92%E5%8F%B7.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
鶴田麻也美，2021,「コロナ禍における『特別活動』指導の意識変化についての考察 ー公立小学校教員インタビュー調査から-」『学苑』昭和女子大学近代文化研究所，964号，pp.63-76.
登坂学，2021,「新学習指導要領の『特別活動』はコロナ禍において『生きる力』をどのように育むかー家庭や社会との連携を通してー」『九州保健福祉大学研究紀要』第22号，pp.35-46.
日本特別活動学会研究推進委員会，2020,『新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた「特別活動」の課題と今後に関する調査　　第一次結果報告』，pp.2-14.
文部科学省，2020a,「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について（通知）」
https://www.mext.go.jp/content/202002228- mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
文部科学省，2020b,「新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について」
https://www.mext.go.jp/content/20200717- mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
文部科学省，2018a,「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」
https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
文部科学省，2018b,「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　特別活動編」
https://www.mext.go.jp/content/1407196_22_1_1_2. pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
文部科学省，2017a,「中学校学習指導要領（平成29年告示）」
https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）
文部科学省，2017b,「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別活動編」
https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku01-100002608_2.pdf
（最終検索日：2022年8月20日）